



図版1 ユーゼン・アルノー作曲〈ミカド・ポルカ〉POLKA DU MIKADO(1889)



図版2 ルドルフ・ディットリヒ作曲〈落梅〉RAKUBAI(1894)

ユーゼーン・アルノー作曲〈ミカド・ポルカ〉 POLKA DU MIKADO(1889)

ルドルフ・ディットリヒ作曲〈落梅〉 RAKUBAI(1894)

日文研「日本関係欧文貴重書」データベースより

19世紀～20世紀初頭の西洋では、日本を題材にした小品楽曲が多数生み出された。そのうちのひとつ〈ミカド・ポルカ〉(1889)は、フランスの作曲家ユーゼーン・アルノーが手掛けたピアノ独奏曲である。当時、イギリスで発表された喜歌劇『ミカド』(1885)の大ヒットに乘じ、フランスの化学メーカー「フェリックス・エイドゥー社」は「ミカド石鹼(SAVON DU MIKADO)」を販売。石鹼購入者へのノベルティとして配布されたのが、本作品であった。喜歌劇『ミカド』の世界観を崩すことなくコミカルに仕上げられたエチュード風の一作である。

同じ頃に発表された〈落梅〉(1894)は、お雇い外国人として来日し、「日本における西洋音楽の父」とも称されるオーストリアの音楽家ルドルフ・ディットリヒが手掛けたピアノ独奏曲である。滞日中、東京音楽学校で教鞭をとったディットリヒは、教育と並行して日本音楽の研究にも精力的に取り組んだ。その経験をもとに、帰国後は日本伝統音楽の旋律に西洋音楽の和声を肉付けすることで、耳馴染みのなかった当時の西洋人たちに日本音楽の魅力を広く紹介した。本作品は、文部省・音楽取調掛撰『箏曲集』第1編に掲載されている「落梅」をピアノ作品として編曲したものである。これらの作品は楽曲自体の魅力もさることながら、趣向をこらした表紙絵からも同時代の西洋人が思い描いていた日本のイメージをうかがうことができる。
(解説：光平有希)